

発達障がいのある人々とは

特定の脳の器質的変化*をもって生まれたために、ある一定の特性をもつ人々を指します。

種類としては主に、「広汎性発達障害(自閉症、アスペルガー症候群など)」、「注意欠陥/多動性障害」、「学習障害」の3つがありますが、人により一つだけのことも、複数併せもつこともあります。

また、子どもの頃からその特性が目立つこともあれば、思春期や青年期以降目立つようになることもあります。そのため、人によって診断時期は様々で、中には生涯、診断がつかないこともあるといわれています。

その数は、文部科学省が平成24年に小中学校の先生を対象に行った「学習面、行動面に著しい困難を示す子ども」についての調査結果の数値である6.5%が一つの目安になると考えられます。元々の「人となり」にこれらが合わさって、その人らしさが生まれることになります。

発達障害の種類	特性
広汎性発達障害 <small>(自閉症、アスペルガー症候群など)</small>	①コミュニケーションの難、②社会性の難、③興味・関心の限定とこだわりの3つが診断基準ですが、人により程度に大きな差があります。 特性を生かした就労上のメリットとしては、「正確さ」、「集中力維持」、「真面目さと熱心さ」などが挙げられます。特に、仕事の繰り返しによる技術向上は特質すべきものがあります。
注意欠陥/多動性障害 <small>(AD/HD)</small>	①注意の持続に難がある、②動きが多い、③衝動傾向がみられる、などにより診断されます。 青年期以降、これらの傾向は軽くなる場合も多くみられますが、日常的な工夫は必要となります。機動性を発揮して自ら動く職種において、特に能力が発揮されます。
学習障害 <small>(LD)</small>	読字障害、書字障害、算数障害などがあります。

※「器質的変化」とは、医学用語で組織や細胞が、もとの形態にもどらないような変化が起こることを言います。



発達障がいのある人々が学校や職場、暮らしにおいてトラブルになりがちな「認識の違い」とその解決策となる支援のポイントを示した虎の巻シリーズ、札幌市のホームページにも掲載していますので、是非、ご覧ください。



この冊子をご利用になる方へ

この冊子の作成に当たっては、関係者で構成されたプロジェクトで度重なる議論を行うとともに、可能な限り、当事者の意見なども伺ってきました。この冊子では同様の悩みをもち苦しんでいる方々へ、少しでも「希望」を届けたという考えから、「グッドジョブ」として表現する最後の1コマを「限りなくベスト」な結果として描いています。実際の場面では、「チェンジ」として掲示したような解決策が短期間でベストな結果を生み出すことは少なく、様々な状況改善の手立てと長い時間をかけた上で、ようやく少しだけ解決に近づく、といったケースが一般的です。「みんながって、みんないい。」そう思い合える一歩を踏み出す一助として、この冊子が活用されることを期待しています。